

東京の文化財



絹本着色五百羅漢図 兆溪元明筆(左:護国寺蔵、右:弘福寺蔵)
画像提供:墨田区教育委員会

目次

東京都指定文化財の新指定	1~3
「東書文庫」の近代教科書関連資料の修理について	4~5
文化財を活かす(葛飾区・稲城市)	6~7
名勝小金井(サクラ)名勝指定100周年	8

東京都指定文化財の新指定

東京都教育委員会は、東京都文化財保護審議会(会長 後藤治)から答申を受け、令和6年3月7日、2件の新指定を決定しました。

新たに指定するもの

東京都指定 有形文化財 (絵画)	けんほんちやくしよく ご ひやく ら かん ず ちようけいげんみようひつ 絹本着色五百羅漢図 兆溪元明筆 36 幅
所在地	護国寺 (30 幅) 文京区大塚五丁目 40 番 1 号 すみだ郷土文化資料館 (6 幅・寄託) 墨田区向島二丁目 3 番 5 号
所有者	宗教法人護国寺 (30 幅) 文京区大塚五丁目 40 番 1 号 宗教法人弘福寺 (6 幅) 墨田区向島五丁目 3 番 2 号
構造形式 及び大きさ	【形態及び法量】掛幅装 縦 209.1 ～ 214.0 センチメートル 横 128.8 ～ 129.9 センチメートル

本作は、17 世紀後半から 18 世紀前半に活躍した黄檗宗の画僧、兆溪元明^{ちようけいげんみよう}によって制作され、延宝 5 年に完成し、弘福寺に納められた五百羅漢図 50 幅の内の 36 幅です。京都・東福寺の画僧、吉山明兆^{きちやんめいせう} (1352-1431 ?) が至徳 3 年 (1386) に完成させた 50 幅の「五百羅漢図」(原本 48 幅と江戸時代の補作 2 幅が現存し、原本は東福寺 (重要文化財) と東京・根津美術館 (重要文化財) とロシア・エルミタージュ美術館に分蔵、以下明兆本) に基づいて描かれています。羅漢は、仏教修行の最終段階に達した釈迦の弟子を指し、五百羅漢は、釈迦の入滅後、經典の編纂等のために集まった 500 人の釈迦の仏弟子を指すとされます。

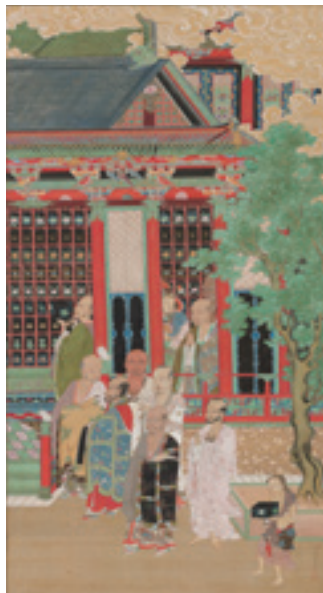
各幅には、羅漢が神通力を駆使するさま、仏教史上の出来事、經典等に基づく仏教説話、僧院における生活など様々なストーリーや情景が描かれています。図様の大枠は明兆本を踏襲していますが、明兆本と比べて画幅の縦寸が約 1.2 倍、横寸が約 1.4 倍となっており、それに合わせてモチーフの大きさを引き延ばし、人物の配置を変更、背景に樹木

や岩を描き加えるなどの改変が行われています。特に羅漢の姿は、頭の形、姿勢、手の動きなど、細かいところまで明兆本をよく写す一方で、上半身が引き延ばされたり、髪や肌の色、衣の色や文様が変更されたりするなどの違いが見られます。また、雲や、建物や壇の部材に鮮やかな色を施す点も明兆本とは異なる特徴です。

江戸時代前期に江戸の寺院に納められた五百羅漢図が、36 幅というまとまった数で伝存している点で貴重であり、当時希少であった大きな一枚絹に濃彩で精緻に描かれている点も、文化財として非常に意義深いものです。現存する江戸時代の五百羅漢図としては、最も早い時期に制作された作品の一つであり、また、17 世紀後半の黄檗宗が江戸に根付き始める時期に生まれた作例としても、絵画史上、文化史上重要な作品です。



(弘福寺蔵)



画像提供：墨田区教育委員会

東京都指定 無形民俗 文化財 (民俗芸能)	さがみりゅうさとかがくら 相模流里神楽
伝承地	板橋区
保存団体	萩原由郎社中（会長 萩原 由郎）

里神楽とは、宮中で行われる御神楽に対して、各地の神社や民間で行われる神楽のことです。笛や太鼓などの鳴り物に合わせて舞う舞台芸能で、全国各地で伝承されています。特に関東地方においては、江戸近郊で継承され発展してきた「江戸の里神楽」のことを指します。神話を題材にした演目を中心に、仮面を着けて無言で舞います。神社祭礼の神賑（神事以外の、神の魂を奮い立たせ、神を楽しませる賑やか行事）として演じられてきた一方で、物語の粗筋を強調し、各時代の世相を反映することにより広く一般の支持を得たように、人々の娯楽としての側面も持ち合わせています。

この江戸の里神楽の流れを汲む相模流里神楽は、江戸時代後期に相模国（神奈川県）から武蔵国南西部（多摩地域及び埼玉県南部）にかけて広範囲に伝来し、江戸近郊の農村で盛んに行われてきました。萩原由郎社中は、この相模流を継承する神楽社中です。初代の門次が相模で修業した後、明治初年に東京へ転身し、明治6年（1873）に多摩郡江古田の原（現在の中野区江原町）で神楽師として独立しました。以後、5代150年にわたり脈々と相模流里神楽・萩原社中を継承してきました。

相模流里神楽は、民俗芸能の変遷の過程を示すとともに、地域的特色を有する重要な無形民俗文化財です。



追加して指定するもの

東京都指定 史跡	ひのしゆくわきほんじんあと つけたり じょうだん ま 1棟 日野宿脇本陣跡 附 上段の間
所在地	(既指定範囲) 日野市日野本町二丁目 15番9 (追加指定範囲) 日野市日野本町一丁目 15番18
所有者	(既指定範囲) 日野市（日野市教育委員会） (追加指定範囲) 個人

日野宿脇本陣跡は、かつて日野宿と呼ばれた甲州道中の宿場の脇本陣跡で、平成22年3月に東京都指定史跡に指定されました。

現在の史跡地内にある脇本陣は、かつて正面に式台を備え、上段の間と呼ばれる接客用の座敷を有する、格式を備えた建物でした。明治26年（1893）に上段の間は主屋から切り離されて現在地に移築され、その後現在に至るまで住宅として利用され現存しています。

所在地は異なるものの、上段の間は、脇本陣跡の格式を示す主たる接客空間として、主屋と一体的な高い文化財的価値を有する重要な建造物であり、附として追加して指定することとなりました。



「東書文庫」の近代教科書関連資料の修理について

1. 東書文庫とは

東書文庫は、1936（昭和 11）年に開館した日本初の教科書図書館です。東書文庫の母体である東京書籍株式会社は、1909（明治 42）年に国定教科書の翻刻発行会社としてスタートしました。創立時は東京都文京区に印刷工場がありましたが、1935（昭和 10）年に北区王子に移転しました。

1933（昭和 8）年に「図書館令」が改正され、全国で図書館が新設されていましたが、教育に関する専門図書館は設立されていませんでした。東京書籍株式会社の第三代社長である石川正作は、日本の教科書を蒐集し保存しなければいずれ散逸してしまうと考え、25 周年記念事業の一つとして教科書図書館を企画し、1936（昭和 11）年に開館、「東書文庫」と命名されました。

2. 所蔵資料の概要

当初の所蔵資料は約 5,500 点でしたが、その後、文部省（当時）から明治時代の検定教科書など約 47,000 点の寄贈を受け、さらに「謙堂文庫」から 13 世紀後半から 19 世紀後半までの往来物約 3,300 点を譲り受けました。また、戦後の検定教科書も改訂期ごとに収集を行っており、現在は約 16 万点の資料を所蔵しています。東書文庫では、中世から現代までの教科書関係資料が体系的に整っています。

3. 重要文化財の指定

2009（平成 21）年には、近代教科書関係の資料 76,420 点が国の重要文化財（有形文化財）に指定されました。ここでの近代とは幕末のペリー来航から太平洋戦争が終結した昭和 20 年代前半までを指します。教科書のように大量に印刷され、広く出回っている資料が重要文化財に指定されたことはこれまでにありませんでした。東書文庫では、近代の教科書関係資料として最も代表的な資料を体系的かつ大量に保存しています。これらの資料群の価値は、わが国の教育史、出版文化史において他の追随を許さないとの評価をいただき、重要文化財の指定に至りました。

4. 重要文化財の修理事業

（1）所蔵資料の劣化と修理

江戸時代以前の資料は和紙でつくられているため、とても丈夫です。明治時代以降の国定制度下の教科書や掛図は洋紙が使われているため劣化が進んでいます。また、太平洋戦争末期から昭和 20 年代の教科書は物資が不足していたため激しく劣化しています。劣化が進んだ資料については、文化庁・東京都・北区と連携して「国宝重要文化財等保存整備費補助金」を受け、2015（平成 27）年より、10 年計画で修理事業を進めています。修理は、高い技術をもつ専門会社に委託

し、劣化の激しい掛図、掛幅など大型教材 288 点を選定して行っています。修理が困難な教科書類などの冊子は、専用の中性紙製保存箱を作製して保管します。

（2）修理の流れ

資料の修理はおおよそ以下のような工程で行われます。

- ① 調査：資料の構造、劣化や破損の状況を調査し、「修理カルテ（図 1）」を作成します。

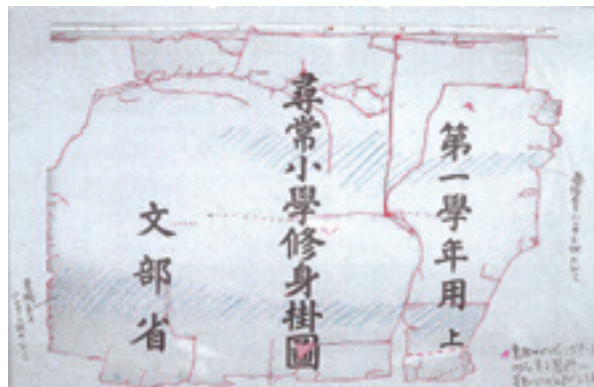


図 1

- ② 準備：修理を行う準備として、軸などを外す「解装」を行います。
- ③ 修理：紙の劣化要因である酸化物を取り除く「洗浄」を行います。その後、裂損部に和紙の紙帯を添付したり（図 2）、欠失箇所へ特別に漉いた補修紙を補填したりして（図 3）、紙力を補強します。

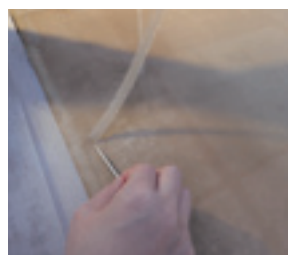


図 2



図 3

- ④ 仕上げ：補修を終えた資料に軽度の圧をかけて平らにする「フラットニング」を行い、「解装」で外した軸などを取り付けます。完成後は高精細の記録写真を撮影し、報告書を作成します（図 4）。修理が終わった資料は専用の中性紙製保存箱を作製して収納します（図 5）。



図 4



図 5

(3) 修理前と修理後

①小学地理掛図 九州地方図 1908（明治41）年

洋紙で作製された掛図や掛幅は、経年劣化により亀裂や著しい折損、皺などが生じてしまいます。

修理前



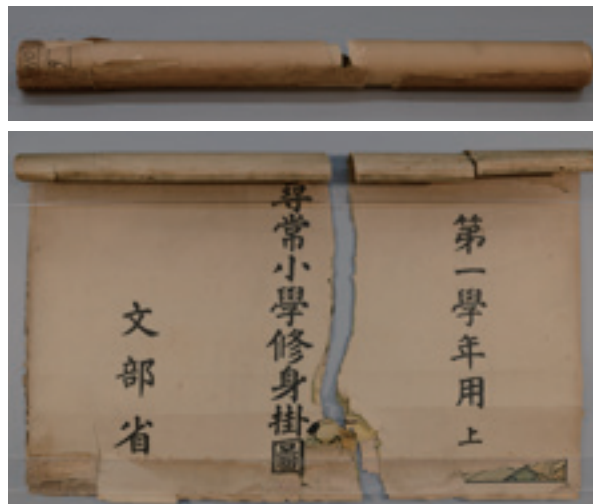
修理後



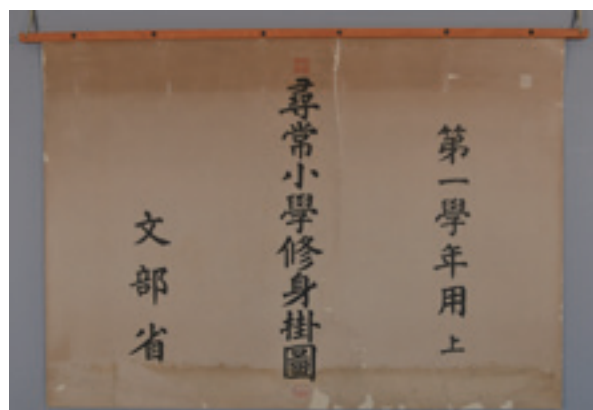
②尋常小学修身掛図 1918（大正7）年

巻かれた状態で保存されていた掛図や掛幅は、巻癖が著しく開閉が困難なものもあります。また、劣化の進行によっては、激しく破損しているものもあります。

修理前



修理後



国の指定による近代の洋紙修理は前例がなく、入念な調査のもと段階を追って慎重に行われました。修理を終え納品された資料を見ると、新たな命が吹き込まれたように感じます。「東書文庫」では、今後も関係各所と連携して、資料の保存と公開に努めて参ります。

多くの方にご来館いただき、日本の教育の足跡をご覧いただけたら幸いです。館員一同お待ちしております。

（東書文庫 館長 高石 和治）

東京書籍株式会社附設教科書図書館「東書文庫」

住所 東京都北区栄町 48-23

電話 03 (3927) 3680

* 閲覧室は水～金曜、展示室は月～金曜に開室。いずれも要予約。

* 利用方法の詳細は東書文庫ホームページ (www.tosho-bunko.jp) をご覧ください。

アクセス JR 京浜東北線王子駅南口 徒歩 10 分

東京メトロ南北線王子駅 1 番出口 徒歩 13 分

東京さくらトラム（都電荒川線）栄町駅 徒歩 3 分

* 写真提供：株式会社 修護

文化財を活かす(葛飾区)

葛西城址と出土した様々な資料

城の発見

葛西城址は葛飾区青戸に所在します。1972年に始まった発掘調査によってこの地に城があることがわかりました。東京東部の低地でみつかった数少ない城跡です。

戦国時代の支配・軍事拠点

葛西城が築かれたのは15世紀中ごろです。当時この地域を支配していた上杉氏が築城しました。この頃、関東は享徳の乱と呼ばれる争乱状態にあり、上杉氏の軍事拠点の一つとして築かれたのが葛西城です。城の東側には中川が流れており、川をさかのぼれば関東平野を北上することができます。こうした交通の要衝に位置することも築城の背景にあると考えられます。



▲葛西城址 井戸(竹と角材で囲われている)

16世紀になると相模小田原を本拠とする北条氏が領国を拡大させ、天文7年(1538)に葛西城を攻略しました。以後、永禄3～5年(1560～1562)の一時期を除き、天正18年(1590)の豊臣秀吉による小田原攻めまで北条氏の支城でした。発掘調査で

幅およそ20mの堀や複数の井戸がみつかり、それらは北条氏の時代に整備されたものと考えられます。

葛西城の中心部は現在、御殿山公園、葛西城址公園となっている区域で東京都史跡になっています。

青戸御殿

北条氏滅亡後、関東には徳川家康が入ります。家康は領内視察を兼ねた鷹狩を各所でたびたび行っています。その際の休息・宿泊用施設として御殿が造営されています。家康は葛飾周辺にも訪れており、葛西城の中心部に御殿がつくられました。この御殿を青戸御殿と呼んでいます。青戸御殿は家康以後も秀忠、家光の三代にわたって使われました。

出土した資料

葛西城址では陶磁器や土器をはじめとする様々な遺物が出土しています。陶磁器は中国産磁器の碗、皿、日本

列島内で生産された瀬戸・美濃産の碗、皿、播鉢、常滑産の甕といった製品がみられます。これらは調理具や液体の貯蔵、食器として使用されました。中国産磁器の中には、壺を乗せた器台もあります。14世紀代、元の時代に製作されたもので、国内では出土例が少ない希少な資料です。戦国時代に伝世したもので威信財として飾られていたのでしょうか。かわらけと呼ばれる素焼きの土器皿も多く出土しています。饗宴などで一度に多数の皿が使われました。小田原で作られたかわらけもみられ、北条氏との関係性がうかがえます。また、鎧の小札、刀装具、鏃、鉄砲の弾丸といった武器・武具類や銅銭などもみつかりました。

葛西城址は低地に立地するため、地下水に保護された木製品が良好に残っているのが特徴です。木製の遺物としては漆器、箸、下駄、櫛、将棋駒などがみつかりました。

漆器は陶磁器の碗類と同様に食膳具として使用されていました。器の側面や内面には鶴などの文様が鮮やかに描かれています。

これら出土品は将来に継承していく大切な資料です。葛飾区郷土と天文の博物館での展示などを通して活用を図っています。



▲漆器 鶴の文様



▲瀬戸・美濃陶器 皿



▲将棋駒 (金将・銀将)



▲弾丸



▲青花器台

葛西城址

所在地：葛飾区青戸7-21-7(御殿山公園)／
葛飾区青戸7-28-17(葛西城址公園)

アクセス：京成本線・押上線「青砥駅」下車 徒歩15分
問合せ先：葛飾区郷土と天文の博物館 (03-3838-1101)

文化財を活かす(稲城市)

稲城市の郷土芸能

1. 稲城市の郷土芸能について

稲城市内には、古来より受け継がれてきた郷土芸能を継承している団体が10団体以上あり現在も現役で活動されています。特に、隔年実施で開催される稲城市ふるさと郷土芸能まつりには、市内で活動している郷土芸能10団体（大丸囃子、穴澤獅子、いなぎ太鼓、押立囃子、雅楽、青渭囃子、江戸の里神楽、稲城囃子、青渭獅子、矢野口纏木遣り）が一堂に会して、稲城の郷土芸能の公演を行います。普段は祭礼や公演会等でしか見ることができない郷土芸能を身近に感じ、堪能することができる貴重な機会となっています。

2. 主な芸能の特色

稲城市矢野口の穴澤天神社の山本家に伝わる里神楽は、国指定重要無形民俗文化財に指定されている「江戸の里神楽」です。言い伝えによると、初代の山本権律師弘信が室町時代初期の応安6年（1373）に創始したと伝えられ、山本家の近くにあった国安神社で里神楽を舞ったのが始まりと言われています。毎年8月下旬の穴澤天神社例大祭の日に江戸の里神楽と穴澤天神社獅子舞が奉納されます。現在の家元山本頼信氏は十九代に当たり、稲城の長い歴史のなかで、江戸の里神楽が伝えられてきたことがわかります。里神楽の特徴は、面をつけた黙劇が中心で、古事記や日本書記に記載された古代神話の世界を題材にしています。獅子舞の由来を記した資料は残されていませんが、江戸時代の銘を残す道具や獅子頭が残されており、江戸時代から伝承されていることがわかっています。



江戸の里神楽

東長沼の青渭神社は、例大祭が毎年10月の第一日曜日に行われ、青渭神社獅子舞と青渭囃子が奉納されます。江戸時代から継承されている獅子舞ですが、その由来について書かれた資料は残っておらず、安永4年（1775）に例大祭が行われ獅子舞が奉納された際に起きた事件の記録が残されており、この時期より前から始められたことはわかっています。大正4年から23年間中断していたものを昭和12年に復活し、現在まで継承されています。獅子舞は例大祭前日に、東長沼地域の中で舞い、祭礼当日は地域の中から青渭神社まで練り歩き、神社の参道を通して神社本殿前に作られた土俵の中で舞います。



町の中を練り歩く青渭神社獅子舞
(昭和10年代撮影)

3. 郷土芸能の公演

郷土芸能の発表の場を設け各団体が連携し郷土芸能の保存と伝承を目的に平成8年度より郷土芸能まつりが始まりました。また、多摩川流域の9自治体に参加する郷土芸能の公演会である多摩川流域郷土芸能フェスティバルにも各団体が参加されています。稲城市の貴重な民間に残されてきた郷土芸能を絶やさぬように各団体が尽力しており、今後も価値を周知して保護・継承を続けてまいります。



郷土芸能まつりでの公演の様子

稲城市の郷土芸能

問合せ先：稲城市教育委員会教育部生涯学習課
稲城市郷土資料室(042-331-0660)

名勝小金井（サクラ） 名勝指定100周年

まちの発展は小金井桜とともに

史跡「玉川上水」内には、小金井橋を中心として東西約6kmに及ぶ、約290年の歴史を有する都内では稀有なヤマザクラ並木の景観が現在も残ります。これらは小金井桜や御上水桜の名で親しまれ、1924(大正13)年に「小金井(サクラ)」(当時は櫻)として国の名勝に指定されるまでとなりました。全国の桜の名所での名勝指定は、史跡名勝「吉野山」(奈良県)や名勝「桜川(サクラ)」(茨城県)とともに国内第1号の快挙です。政財界・地元有志等による保護活動が実を結んだ瞬間であり、「桜博士」として知られる三好学士による小金井桜の研究も大きな後押しとなりました。

この桜を愛でるために全国から多くの花見客が訪れ、小金井は行楽地として賑わいました。現在の武蔵小金井駅は、指定に先立つ1924年4月に作られた花見客のための仮乗降場を前身とするとも言われ、小金井桜は小金井周辺地域の発展に大きく寄与しました。

100周年をきっかけに笑顔を広げたい

本年12月9日に「小金井(サクラ)」は名勝指定100周年を迎えます。小金井桜の歴史を尊び、次の100年に繋いでいくための契機として、小金井市では小金井桜を「知る つなげる 笑顔広がる」ことを事業理念に掲げ、「名勝小金井(サクラ)名勝指定100周年記念事業」を実施します。参加型事業から記念グッズ・PR動画制作まで、さまざまなイベントを予定しています。

<イベント予定>(一例)

- 100周年記念式典
- 小金井桜フォトコンテスト
- 文化財センター季節展「名勝小金井桜」
- 公民館成人学校「小金井桜と日本の桜」
- 小金井桜観桜会と花の宴
- プロモーション動画制作、他



満開時期は例年3月末から4月上旬頃

名勝を構成するヤマザクラは一本一本に個性があり、早咲きから遅咲きまで開花期間も多様で、3月中旬から1か月間楽しめます。玉川上水堤のヤマザクラが満開となる時期は、ソメイヨシノから1週間ほど遅れて例年3月末～4月上旬頃です。

平成22年度からヤマザクラ並木の整備を進めてきた結果、都立小金井公園周辺の玉川上水ではかつての美しい景観が再生してきています。春の玉川上水は、さまざまな在来の草花も芽吹き、土手を彩り始めます。貴重なニリンソウ・クサバケとサクラの共演も見どころです。江戸時代の面影や歴史を感じられるお花見に是非お越しください。

問合せ先

小金井市教育委員会生涯学習課文化財係
電話 042-387-9879
イベント情報はQRコードから



編集後記

3月に入っても寒い日が続きましたが、この号が出る頃には寒さもやわらぎ、春の訪れが感じられていることと思います。

暖くなるこれからの季節、東京の文化財を訪ねて、お出かけしてみたいはいかがでしょうか。

令和6年3月31日

発行 東京都教育庁地域教育支援部管理課

〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号

電話 03 (5320)6862